

## 京都市の都市政策のあり方を問うシンポジウム

昨日 12 日午後、ハートピア京都大会議室で表題のシンポジウムが開催された。案内で、「京都市は、現在、京都駅周辺などで高さ制限を大幅に緩和する都市計画の変更に向けた手続きを進めていますが、これに対して学者専門家など 30 人がよびかけ人となって、2 月 6 日、高さ制限などの緩和に向けた都市計画の見直し作業の中断を求めるアピールを発表しました。今回の高さ制限緩和などの京都市の方針は、これまで積み重ねられてきた景観の保全・再生に向けた多くの市民や先人たちの努力を無にし、歴史都市としての京都の未来を危うくするものであり、また市民の暮らしの環境を破壊する危険をはらんでいます」と述べて参加を呼びかけた。

シンポジウムでは、まず京都府立大学名誉教授・元学長の広原盛明氏が「京都市の都市政策のあり方を問う」と題して講演した。京都の歴史地理から始まり、京都の人口、ホテル・民泊バブルへと話をすすめ、規制緩和で都市活性化はできないと締めくくった。久しぶりに広原先生らしい迫力ある講演をお聴きした。つづいて、宮本憲一先生が写真のように「大都市政策の転換を一持続可能な都市をめざして」と題し、京都の高さ規制緩和について広い角度から問題を提起した。中林浩・元神戸松蔭女子学院大学教授は「京都の社会・経済を疲弊させる高さ規制緩和」と題し、2007 年の京都市新景観政策と今回の規制緩和について、人口動態などのスライドから具体的に問題を投げかけた。「タワマンは荒れた町の墓標に」という指摘に注目した。



これら 3 報告は示唆に富む情報や指摘が多く、じっくりレポートなどで紹介していく。京都弁護士会会長の挨拶も参考になった。休憩のあと、会場からの発言となり、山科や伏見の住民、まちづくり団体などから京都市による一方的な高さ規制緩和について批判の声がつついた。

私も思い切って発言した。宮本先生が「醜悪な景観」と言われた大阪から来たとして自己紹介して、関一市長時代からの整然とした高さの御堂筋が、開発ラッシュで高層ビルが乱立して、景観が破壊されつつある。まさに醜悪な景観、政治だ。京都がこんな大阪の後追いをするのはやめるべきだ。今回の規制緩和がなぜ都心部でなく、山科や伏見などの周辺部なのかと、広原先生に質問した。

京都市は昨年 9 月「京都市 駅周辺等にふさわしい都市機能検討委員会答申」を受け、市内 5 ヶ所で建物の高さ制限などを大幅に緩和し、そのうち山科区の外環状線沿道や向日町駅周辺、伏見区の淀駅周辺などで高さ制限を廃止する方針を打ち出した。広原先生によると、都心部では規制緩和への反対が予想され、人口減の周辺部が狙い撃ちされたのでは、政治的な判断でないかと。また続報したい。

(2023 年 3 月 13 日)